

『工藝』——柳宗悦が「民藝運動」を推進するにあたって、昭和6（1931）年から昭和26（1951）年に至るまで、隔月で20年にわたり、通算120号出版した雑誌である。今日では稀覯本で、芹澤銚介意匠の帙に入った全巻揃いともなれば、古書店で数百万円の値段がつく。表紙の布や活字の選定、和紙の漉きから本文の組みまで、細心の注意が払われている。当時1冊1円50銭とは、半端な値段ではなかった。ところが立命館大学の磯部直希氏の調べによれば、その装丁には、平綴じで紙が打られている。和紙を大型釘打ち機械で無造作にもガチャンと留める神経に、磯部氏は驚愕したという。「鶴首」と称した製本用紙打ち機械は、大正末年以降、国産化され、普及していた。機械化の進む産業化の時代であって、柳たちは「工藝」の手仕事の価値復権を標榜していたはず。その彼らが、ほかならず自らの機関誌を綴じるのに、最新鋭の機械に頼っていた。刊行終了から半世紀を経て、紙に錆びが出たために判明した事実である。

いったい柳たちは、いかなる意識をもって雑誌『工藝』を、西洋伝来の製本用ホッチキスで綴じたのか。この話題を巡って諸説提出され、議論が盛り上がった。柳がある時期から意識していたウィリアム・モリスも、ケルムスコット・プレス発刊に際して、綴じは機械任

『工藝』はどこまで「工藝」的か？

柳宗悦の出版装丁事業に潜む西欧近代の符牒

2734

2005

7月16日

稲賀敏美

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授
稲賀敏美

せで構わぬと発言して、周囲を驚かせている（鈴木禎宏氏）。柳夫妻は壽岳文章夫妻と『ブレイクとホキットマン』（1931-2）を手作り装丁で作っている。だが、煩雑な手仕事に最初に音をあげたのは、晩年には、無心の反復作業にこそ工藝の尊さを訴えたはずの柳宗悦ご本人だった。柳の没後、壽岳はそう証言している。藝術家意識以前の、職人の無意識の営みへと、意識的に回帰しようとするところに、柳民藝運動の核心があった。その出産外傷といってもよい逸話ではないか。

和紙に金属なんて、という拒絶感が、すでに「民藝」への先入観。むしろ和紙を平気で金属によって製本してみせるこの「異様」さにこそ、当時の柳の異端性を見るべきではないか（山田実「伝統織物保存協会」事務局長）。さらに、舶来最新のピカピカの技術の投入にこそ、柳の民藝運動の進取の氣勢を見るべきでは（鶴岡真弓氏）。そもそも柳は紙にジャムをかけ、パンに納豆を塗る、東西混淆の実践者だったはずではないか（鈴木禎宏氏）。さらには本格的な革装の豪華洋装本を作ろうとする姿勢に、柳の西洋崇拜は明らかなはず。東洋の素材を西洋の理念で束ねて見せたのが、柳の「工藝」観であり、その具現が『工藝』のバイディングだろうたのではないか（稲賀）。

問題なのは、革あるいは

金属の紙という素材が、日本という風土に適していたかどうかだろう。西欧では貴重本の保存にも革や金属が多用され、公共図書館では和装本の保護にも援用されている。乾燥した欧州の風土では適切な方法だ。しかし、アシカビの繁茂する高温多湿の日本列島では、高価な皮革は微ですると剥け、鉄の紙は赤く錆び落ちる。とすれば、金属による製本に、柳の秘められた悪意を見るのは当たるまい。むしろ金属紙は、柳の時代のモダンな感覚の発現だろう。だがその選択は、半世紀の風土体験を経て、和紙に対する悪意へと変貌した。そこに柳の企画の弱点を指弾するのは容易だろう。とはいえ、明日は我が身、ではないか。

束ねるべき紙が腐ってしまった『工藝』。そこに何の比喩を読み取るべきだろうか。手作りと機械との価値観の相克を生きた、時代の証人としての『工藝』。はたしてこの工芸作品は、新たな金属紙で「修復」されるべきなのか。それとも風土に調和した和紙の紙繕りに代替して、和風に「修繕」されるべきなのか。そこには「保存」を巡る文化行政の政治性が露呈する。

*磯部直希「壽岳文章以降の書籍装丁と修復の諸問題」国際日本文化研究センター共同研究会報告（2005年4月23日）に触発された。磯部氏、および討論者の皆様に感謝する。